

業務完了報告

2019 年度 AG5 の中心課題に沿って ○成果／●課題

1. グローバル・スタディーズのカリキュラムの評価と改善

- 全学年を通じて、教科を横断して授業を行うことができた。特に、社会と理科で行い、時に学年全体のカリキュラムを変更して行うことができた。
- 今までは、年間計画にある通りに校外学習を行うことが多かったが、今年度は校外学習をタイムリーに設定することができた。
- 学期ごとのカリキュラムマップを作成し、反省点・改善点を具体化することでカリキュラムを改善し続けることができるように工夫した。
- 4月からの新任教員でもグローバル・スタディーズを教えることができるように、「グローバル・スタディーズとは何なのか」分かるような文書を作成した。
- 今年度導入した iPad を盛んに活用し、プレゼンテーションやリサーチだけでなく、思考ツールを使って考えを可視化したり、動画をつなげて全校への啓発を行ったりすることができた。
- バイリンガル教科として、教員が英語を使用するよう心掛けた。また、英語科の先生とのティームティーチングをグローバル・スタディーズに導入することにより、児童の英語使用場面が格段に増えた。
- グローバルクラス集会を毎月開催し、それぞれが学んでいることを共有したり、ミニ自由研究発表会を開いて、学年を越えてお互いの良さを認め合ったりした。また、たて割りチームでの活動を増やし、6年生のリーダーシップを培おうと工夫した。

- 英語の使用にこだわってきたことにより、児童によっては深い思考をさせることができないことがあった。グローバル・スタディーズの本来の目的を考えると、英語で考えたら深く考えることができないような学習活動の際には、日本語を奨励することも大切なのではないかと。
- 各学年、学期ごとにカリキュラムマップをつくったものの、あくまで今年度の児童・担当教員にとってのカリキュラムマップであって、来年度の児童・担当教員にそのまま適用できるかは不明である。むしろ、このカリキュラムマップがあることにより、新しい担当教員がそれにしぼられるあまり児童に合った学習活動が仕組みなくなるのは避けたい。
- それぞれの校外学習は意味があったのか、検証する必要がある。効果が薄い校外学習については、積極的に削減し、違う活動に替えていく必要がある。
- 今年度グローバル・スタディーズを主で担当した教員はすべて、昨年度の前任者の授業を見てきた教員である。これが全く経験したことのない教員が担当した時に、果たして今の環境で対応することができるのかをしっかりと検証し、可能にするそれなりの環境を整える必要がある。
- グローバル・スタディーズの学びや成果を保護者や地域にもっと広げる必要があるのではないかと。ブログで発信するだけでは限界があるのではないかと。

今年度はグローバルクラス設立当初から所属し、グローバル・スタディーズのカリキュラムを担当してきた教員が離任し、グローバル・スタディーズをどのように進めていくかが我々にとって大きな課題であった。そんな中、児童の考えや興味関心を単元計画に生かせずに、前任者がやってきたことをなぞっていくような状況もあり、この1年間反省と改善を繰り返してきた。この難しさを少しでも解消しようとして作成したのがカリキュラムマップである。来年度はこのカリキュラムマップを生かしつつ、担当教員と児童が最良の方法で学べるようなグローバル・スタディーズの形をつくっていききたい。

また、グローバル・スタディーズの授業の中での英語の扱いについても議論を重ねた。昨年度の反省を生かし、今年度はバイリンガル授業と銘打ったグローバル・スタディーズの中では英語を重視してきた。しかし、どんな時でも英語を使うことが優先されるあまり、児童の深い思考を促せない場合があった。英語と日本語の授業内でのバランスを考えながら、使い分けさせるような場面設定の工夫が必要である。

2. E ラーニング教材（i-Ready）による英語教育の強化

- 毎学期始めの診断テストで英語力の伸びをみて、児童も教員も客観的に振り返ることができた。
- i-Ready の英語力診断テストを見ると、グローバルクラス全児童の英語力が伸びたことが分かる。
- 診断テストの結果により児童を習熟度別に分け、レベル別リーディングに取り組んだ。
- 取り組みを視える化し、児童の i-Ready への取り組みを促した。

- 児童によって、家庭での i-Ready の取り組みに差があった。
- i-Ready の診断テストをいつ行うかによって、点数がかなり前後し、正確な英語の能力を測ることができていないか疑わしいことがあった。

グローバルクラスの課題の一つである英語力の格差に対応するため、今年度から英語の授業内でレベル別の学習活動を取り入れた。特にレベル別のリーディング活動では、学級内をレベル別に4から5つのグループに分け、それぞれのレベルに合った本を児童が自主的に読み進め、課題に対してディスカッションを通して答えを見出す活動を行った。このレベル別に分けるための資料として、i-Ready の英語力診断テストを主に参考にした。昨年までと違い、レベル別に本が選ばれているため児童は内容をほぼ理解でき、興味をもって主体的に読み進めたり討論に参加したりする姿が見られた。今年度は隔週程度に行われていたこの活動を毎週必ず取り入れていきたい。

反省点としては、診断テストを午後にしたり行事への練習期間中にしたりすると、テスト中の集中力が続かず適切に診断ができないことが時折見受けられた。来年度は児童の心身の状態をしっかりとつかみ、より正確に英語力を診断できるような環境をつくることができるように配慮したい。

また、来年度は学校でも気軽に i-Ready で学習ができるような環境づくりをつくっていききたい。授業の中で活動が早めに終わった児童が i-Ready に取り組んだり、ハッピータイムと呼ばれるモジュールの時間にも個別最適化のツールとして使ったりと、i-Ready を今までよりも活用していきたい。

3. 戸田市との遠隔による教員研修および授業実践の実施

- 海外との遠隔交流の接続上必要な機器の確認ができた。
- 児童対児童の交流を継続的に実施することができた。
- 学習した英語を活用する場面を設定することができた。
- 画面を通じた交流における児童のプレゼンテーションスキルが向上した。

- それぞれの立場で学びの深まりがあったかどうかの検証が必要である。
- GC と美女木小児童の英語力の差が顕著である。
- 実施授業時数の確保が難しい。
- 各交流が単発的でテーマの一貫性がない。

来年度は、「グローバルへの気付きを促すプロジェクト型の交流」を行う。この交流の主な目的は多様性への気付き、日本人としてのアイデンティティを育むことである。日本人の学校でありながら、違う国にある学校を比較しそれぞれの差異を見出すことで生活の違いを認識する。次年度に向けて、年間計画を作成することで、他の学習活動に影響が出ないよう計画的に進めていく。

4. 中学部での探求型学習の単元開発

- 中学部 1 年の英語 A クラス（習熟度別に少人数制をとっており、レベル別に A～E クラスを設置している）において GS の考え方を取り入れた授業に取り組んだ。
- 生徒が学術的な文章（説得するための文章など）を書き、批判的思考を表現する場として、「トピックニュース」「トーク形式のプレゼンテーション」「リサーチペーパー」などを設置した。
- 今年度の英語 A クラスにおける取組から、英語 A クラスだけではなく、B クラスの生徒にも同等の授業が展開できる可能性が高まった。

- 英語の授業だけで、生徒の探究的な力を伸ばしていくことは難しい。
- GS について、進め方が分からない教員が多い。

今年度は英語の授業の中で、限られた生徒に対して「GS」の考え方を取り入れた授業に取り組んだが、総合的な学習の時間において、「GS」の考え方を取り入れた活動を組み込み、全生徒の探究的な力を伸ばすことができるようにしていきたい。

また、「GS」についての理解を促すために、AG 5 の助言者を招聘し、中学部教員への研修の機会を設けたい。

5. イマージョン教科における成果と課題

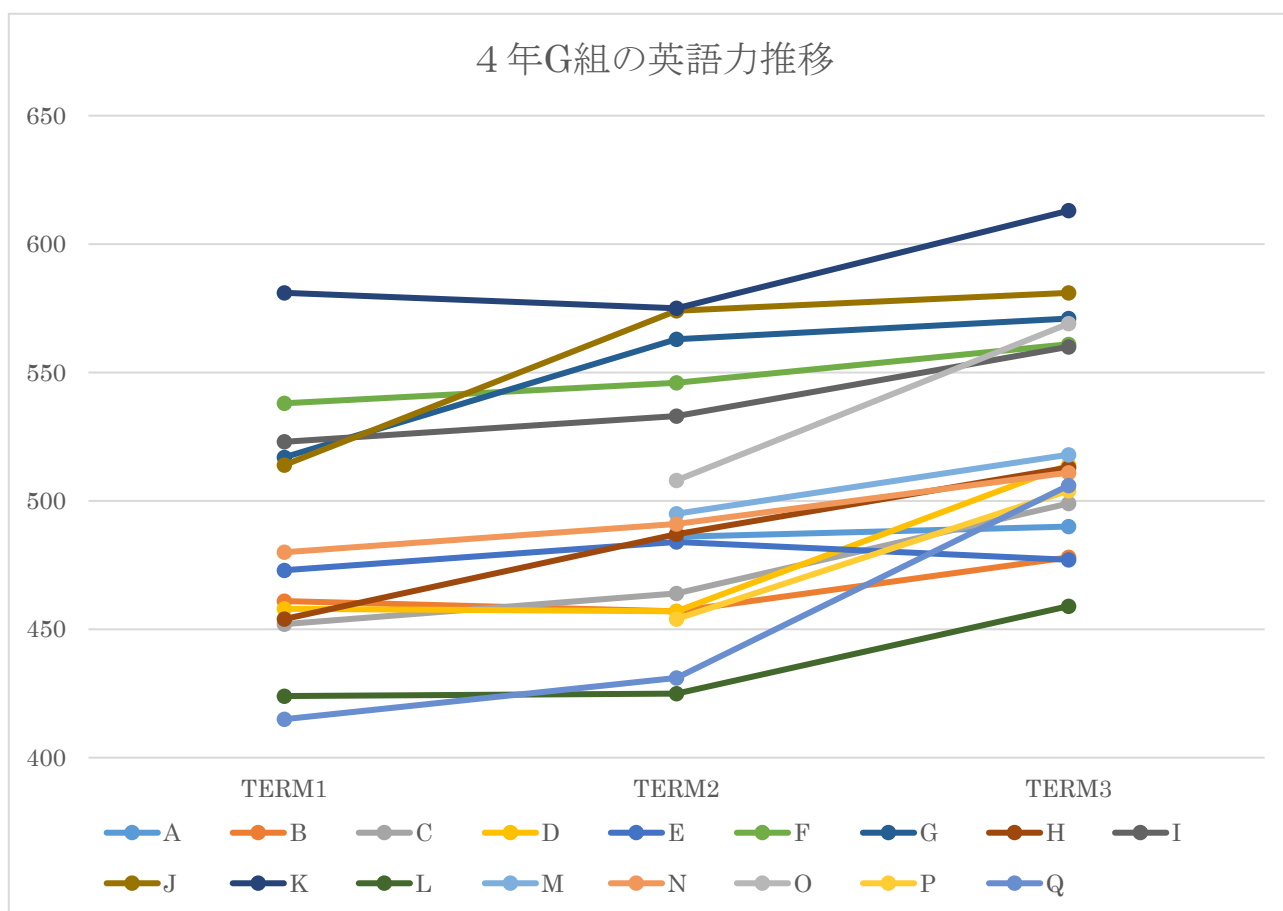
- 昨年度は授業中の教員の説明が多すぎたという反省を生かし、活動を主体にした授業を心がけた。活動主体の授業を仕組むことで対話が増え、主体的に学習する姿勢がよく見られるようになり、児童の理解が深まった。
- 単元の順番を必要に応じて入れ替えるなど、子どもたちの学習への主体的な姿勢を促すために、グローバル・スタディーズとの教科横断的な学習を積極的に進めた。その中での校外学習も効果的だった。
- イマージョン教科において、児童の日本語使用を教員が注意することは今までなかったが、今年度途中から英語の先生とだけでなく、友だちとも英語を使って会話するよう声掛けをした。その結果、英語を苦手と感じている児童でも英語を使おうとする姿勢が見られるようになった。
- イマージョン教科においては、英語で授業をし、単元の終わりに日本語で確認の時間を取った後に英語と日本語両方のテストをする必要があるのですが、昨年度は授業の進度が遅れがちになっていた。今年度は日本語のテストの実施と返却・解説を算数の授業ではなく、ハッピータイム（お昼休み後のモジュール学習の時間）やその他の授業に行ったため、円滑に授業を進めることができた。
- 昨年度までは発達段階を考慮し、4年生には操作活動を主に取り入れた。そして、5年生と6年生でも授業の流れを「教員が教える時間」「児童が活動する時間」「発展・まとめの時間」とパターン化させることで、子どもたちは見通しをもって学習活動に取り組むことができた。また、英語を苦手と感じている児童の手助けにもなった。
- 児童の発言を活かした授業を展開しようとする中で、英語を苦手と感じている児童は英語で考察をしたり、全体で発言したりすることに難しさを感じていた。
- 教師の説明が多く、活動が少ない授業になり、児童の学習意欲を高めることができないことが依然としてあった。

昨年度の児童・保護者アンケート結果や教員の反省より、今年度はイマージョン教科の授業改善がグローバルクラスの大きなテーマの一つであった。東京学芸大学附属大泉小学校の細井宏一副校長先生の模範授業を参観したり、ティームティーチングを組む日本人教員との授業前の話し合いをより多くもったりすることにより、昨年度特に説明が授業の中心だった算数の中で活動を多く取り入れることができた。しかしながら、進度を気にするあまり説明が多くなってしまうこともあり、いかに算数の授業時数を確保するかが課題であがった。

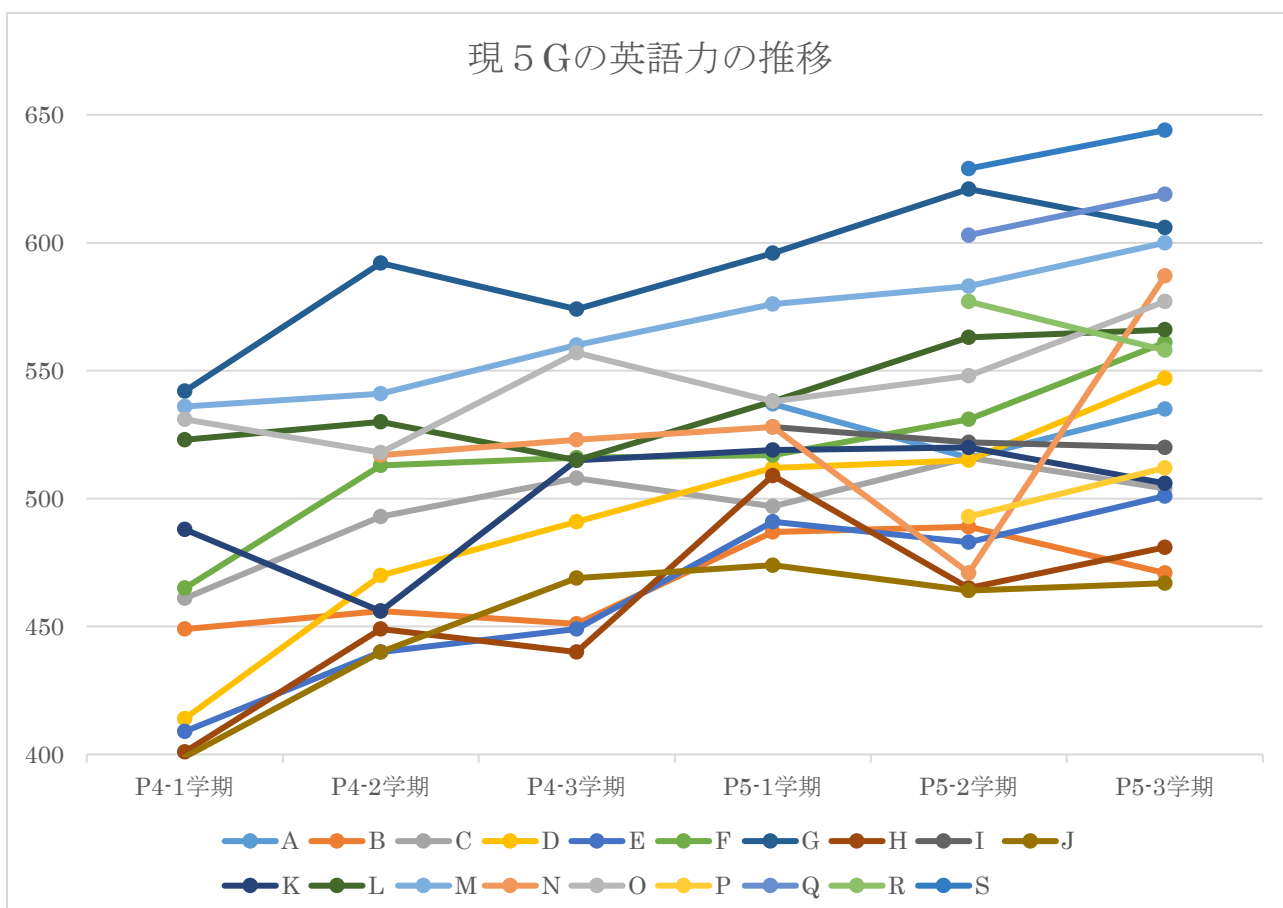
また、来年度はグローバルクラスに2名の新しい英語の先生を迎えることとなる。日本の学習指導要領、そして日本の教え方をしっかりと理解しながら授業ができるよう、ティームティーチングを組む日本人教員との話し合いを多くもつ、本校通常学級の日本人教員の算数の授業を参観する機会を設ける、そして日本出張で先進校の授業を参観するなど、年度当初から計画的にサポートしていきたい。

I-Ready の英語力診断テスト結果

4 年G組の英語力推移



現 5 Gの英語力の推移



保護者・児童アンケートより

- グローバル・スタディーズの授業に対しては、全学年 100%の児童が「授業が楽しい・面白い」と答え、98%の児童が「GS の授業は分かる」と答え、肯定的な結果となった。これは昨年とほぼ同じ結果であるが、今年度グローバル・スタディーズを担当する教員が全員新しくなったことを考えると、意味のあるアンケート結果といえる。
 - 上の学年に行くほど、「自分の学習を自分で管理することができる」、「いろいろな立場や見方で考えることができる」と感じている児童が多い。特に5年生の数値が著しく向上している（76%から 95%）のは、グローバル・スタディーズの授業の中で、ルーブリック評価を活用したり、ことあるごとに物事の裏面性を視点にして考えたりする活動を取り入れたことによるものが大きい。
 - 「プレゼンテーションの機会が十分あり、堂々と考えを表現できるようになっている」という項目に対して、多くの保護者（82%）が肯定的に感じており、グローバル・スタディーズを中心として、他の教科でも自分の意見をしっかりと表現することに力をいれた結果が出た。
 - 児童の自由記述に「貧しい地域へ行ってお手伝いをしたい」や「世界の現状や平和のための活動をしている人について、もっと知りたい」など、自分の学びを生かして自分にできることをしたいと感じている児童がいる。
 - 多くの保護者が6 ゴールズの達成を目指して子どもは日々活動している（94%）と感じている。
 - 7 月のアンケート結果を客観的に捉えて反省し、授業の内容を改善することで、数値が伸びた教科がある。（5年生の英語「楽しい」83%から 100%、「わかる」83%から 89%）
-
- 自由記述で「自分で壁を乗り越えられず、苦しみもがきながらなんとか乗り越えていくような経験をたくさんしてほしい」と書いた保護者がおり、「ラーニングピット」を活用する意義を感じる。
 - 総じてどの教科でも、児童が興味をもって学習できる手立てが必要である。
 - 今年度は宿題が多くなりすぎないように、学級担任が時期や量をしっかりと管理・調整したため、宿題についての指摘はいまだあるものの、以前に比べるとかなり減った。
 - 英語で会話できる機会をもっと欲しいという意見がある。
 - 上の学年に上がれば上がるほど、家庭での i-Ready の取り組みが甘くなっている。
 - 教員の入れ替わりが早いことに不安を感じている保護者がいる。
 - 中学部にグローバルクラスを設立してほしいという声がある。
 - グローバル集会だけではなく、普通の授業でも、4年生から6年生で混ざり合って学習したいという児童がいる。特に4年生に多い。
 - 英語や算数など、自分のこどものつまづきをどのように手助けしていけばよいのかわからず不安に感じている保護者がいる。

来年度の新しい取り組み

1. 教科横断を掲示物で可視化

先進校の視察の際に、学んだことを「つなぐ」「つながる」「つなげる」ことが深い学びを呼び込むということを学んだ。グローバル・スタディーズの学習でも、児童が社会や英語、理科で学んだことと比較して考えたり、説得力を高めるための裏付けに活用したりできるように、それぞれの教科の学びがリンクするような掲示の工夫をする。

2. 学校外のリソースを活用

今までも校外学習など、学校だけで学べないことを学ぶ活動を効果的に学習に組み込んできたが、来年度は更に幅広い形で学校外のリソースを活用したい。校外学習はその学習効果を確認しながらこのまま続け、地域の専門家や他の学校の同学年の児童との交流なども積極的に行っていきたい。また、今年度の美女木小学校との遠隔授業の経験を活かし、日本にいる専門家とビデオ会話したり、海外の児童とのビデオ授業などにも挑戦していこうと考える。

3. 広報活動をより活発化

今年度は写真を多く、文字を少なくすることで、ブログの更新頻度を昨年度よりも5倍以上高くした。しかし、ブログの入り口自体が学校ホームページの見えにくい場所にあることなどから、半年たって初めてその存在に気が付いたという保護者さえいた。そこで、よりグローバルクラスの学習活動や成果について広く知ってもらえるように、違う方法を模索していきたい。また、今まではグローバルクラスの教員の中だけで共有していたような内容も、保護者やネット上に配信し、よりグローバルクラスの魅力が伝わるような工夫をしていきたい。

4. 英語の本を活用

グローバルクラスでは、英語力を伸ばすためには本をよむよう促すことがよくある。しかしながら、校内に英語の本が少なく、あったとしても古く児童があまり興味を持ってないものばかりであった。今年度AG5予算で購入した英語の本と現在の英語の本を視覚的にも分かり易く配置することで、多くの児童が英語の本を手にとって読むよう工夫したい。また、英語の授業でのレベル別リーディングプログラムや朝の読書の時間でも積極的に英語の本を活用したい。

5. ハッピータイム（モジュール学習の時間）を英語力向上に使用

毎週3回（1回15分）あるハッピータイムでは、i-Ready やレベル別リーディング、英文法を確認するなど英語の時間として扱う。特に、発達段階を考慮に入れると、英文法を学習することは英語力向上に非常に大切であるが、通常の英語授業内では時間をとれないので、ハッピータイムを活用して文法の確認を行いたい。

6. 英語の辞書を活用

児童の英語力向上において、語彙力アップはとても大事な要素であるとする。今までは分からない語句を英語教師に聞いて理解することがほとんどであった。しかし、来年度教師は簡単には答えず、辞書を引いて分かることに関しては児童が自ら辞書を引くよう促したい。

7. 美女木小学校とのプロジェクト型交流プログラムの導入

日本人学校と日本の学校とをつなぐ遠隔交流授業において、これまでの単発的なトピック交流を改善し年間を通したプロジェクト型授業を行う。これにより、日本人としてのアイデンティティの醸成やグローバルに対する気づきを促すことをねらいとする。

8. ICT の活用

G suite for education プラットホームに登録。児童の情報活用能力を高め、より効果的で即自的なフィードバックを可能にする。児童の個別探究を支援することができる。また、英語や算数の個別学習プログラムを活用することで、個別に最適化された学習を提供する。一斉授業と併用することで児童の習熟度にあった学習を実施することが可能となる。アプリやプログラムについては現在検討中。